

アルバム 夢ばかりのミ・アモーレ 歌詞

全 作詞 / 作曲 オーノキヨフミ

Copyright © オーノキヨフミ All Rights Reserved.

あいつの春

雪どけ 揺れる ねこやなぎ 振り返らずに背伸びする
痛みなんてものが無い様な 顔で 遠い空を見てる

よろこび 笑い 泣き叫び 子供の様に ふざけ合い
やがて僕ら はなればなれに なって 同じ月を見てる

あこがれてる 存在には 愛の手を
立ち止まっている 君にも 愛の手を

当たり前の 毎日を 抱きしめて それでも少しは疑って
ものたりないならはみ出して この手を かざして また 生きてゆく

探してた物は 見つかったって 誰かがいつか 言ってたよ
変化なんてものは無いはず無いさ だけど きっと 会える

あこがれてる 存在には 愛の手を
立ち止まっている 君にも 愛の手を

ああだの こうだの 言っても 毎年 春は来る 君にももうすぐ会いに行く
思いのままを伝えたら この手を かざして また 生きてゆく

今すぐ君を抱きしめたいよ 春を待つ間 奏でる言葉は 愛

当たり前の 毎日を 抱きしめて それでも少しは疑って
ものたりないならはみ出して この手を かざして まだ 生きてゆく
ああだの こうだの 言っても 毎年 春は来る 君にももうすぐ会いに行く
思いのままを伝えたら この手を かざして また 生きてゆく

あこがれてる 存在には 愛の手を
立ち止まっている 君にも 愛の手を

世界とディープキス

学校からピストルが 明日から飛び交うよな
そんな世界に ならぬ様に
混沌から抜け出して スタンバイから蘇り
このリアルに 飛び出こんで

世界とディープキス 今だけは 時を止めて 笑って
下弦の月に照らされて 孤独な夢 希望に変えて

スタッカートな駆け足で 人ごみから抜け出して
振り返れば 誰もいない
ボロを出しても よしとしよう
止められない 情熱

こんな世界に 咲いた花でも どうして心を 奪われるのだろう

世界とディープキス 今だけは 時を止めて 笑って
下弦の月に照らされて 孤独な夢 希望に変えてくれ

世界とディープキス 今だけは 時を止めて 笑って
誰より先に この青い 星の様に 抱きしめくれ

夢ばかりのミ・アモーレ

改札越えたら 山の様なビルが並ぶ 大都会
線路がつないだ ドアとドアが しかめ面で あくびする
すべてが ここでは 当たり前の景色 君はこの街で何を望むだろう

堤防あたりにやたら高い 電波塔が立って
だれかれかまわず先に行けば 足をつかまれる
よごれた瞳で 何を見てきたの この街はすでに操られているのさ

夢ばかりの ミアモーレ すぐにアクション させて
すべてを信じてたらすべてを失う
遠くに旅に出ようぜ それでいいよ それで
くだらない世界でも この目で選ぶから

三年越えたら どこに何があるか大体わかる
こんなにも こんなにも こんなにも 素敵な大都会
崩れた屋根から 空を見上げれば 誰かの夢の跡が微笑んでるよ

(20世紀の傷跡を背負ったまま 21世紀がやってきて

月にも行かず 戦争もやまず

テレビの情報を真に受けて

僕らは一体何をしてきたのだろう)

夢ばかりの ミアモーレ すぐにエンジン かけて
すべての始まりならすべてを捨てよう
太古の世界から 続く読書 繰り返す
飛び出した化石から 嘆きの声がする

夢ばかりの ミアモーレ すぐにアクション させて
すべてを信じてたらすべてを失う
遠くに旅に出ようぜ それでいいよ それで
くだらない世界でも この目で選ぶから

サンディー

おおサンディー 今日もこの胸は 風に吹かれては震えてる
ため息まじりの 交差点で 君は何を見る

おおサンディー 君はこれからも いくつもの嘘や悲しみを
ポケットいっぱい詰め込んで この世界を泳ぐの？

涙だけを 愛さないで

おお サンディー 僕に 微笑んで おお サンディー 君が好きだから
孤独に負けそうな夜もある そんな時は 呼んでおくれ 僕を

おお サンディー そうだ僕達は 笑顔ばかりじゃられない
誰でも心にもう一人の 自分を持っている
一人ぼっちに 帰らないで

おお サンディー 君は どれくらい おお サンディー 僕を知っている？
形あるものだけじゃない 君をもっと 知ってたいよ ああ

嘘や裏切りで傷ついて 泥まみれになっても 君がいなけりゃ
春も夏も秋も冬も 訪れない

おお サンディー 僕に 微笑んで おお サンディー 君が好きだから
孤独に負けそうな夜もある そんな時は 呼んでおくれ

おお サンディー 僕は ここにいる おお サンディー 君のそばにいるから
サンディー だから笑っておくれ どんな時も そばにいるよ サンディー

真夜中のフリーマン

目を閉じて 眠りにつく前に まぶたの裏 浮かぶその景色
心の中にターミナル 真夜中過ぎの Free Man

美しい君に奪われた 心 それは どこか かりそめの世界の様

僕らが 自由人になりたいならば 誰かが 言っていた 幸せを
捨て去っちゃいな そんなで どうすんだ？ 君が感じている幸せを
ただつきつめるんだ 心の声を取り戻せ

父さんや母さんや友達の 目に映るこの世界と君の
見てる世界はちょっと違う それは君だけの世界さ

形あるものに 奪われた 心 それは どこか かりそめの世界の様

僕らが 現代に 飲み込まれずに 自分の 言葉で 話せたら
行きたい場所に きっと 行けるんだ 世界はとっくに君のもの

聴かせてやりたいんだ 心の声を取り戻せ

存在を 信じたければ 誰かが 言っていた 現実を
うたがっちゃいな そんなで どうすんだ？ 君が見たリアルが肝心だ
僕らが自由人になりたいならば 誰かが 言っていた 幸せを
捨て去っちゃいな そんなで どうすんだ？ 君が感じている幸せを
ただつきつめるんだ 心の声を取り戻せ

我無 我無 我無 我無

太陽と土の子

茜色に染まる雲 悲しみ越えて 飛んでくるよ
扉を開ける 君の手と 季節の影 重なる

太陽は認めた 大地に抱かれて生きること
たいした事じゃなくても 君に言われれば 輝いて聞えるよ

どうして僕等は出会い 君の髪も乱れる
最後に見つけた嘘も 消せない思い出達も
飲み込んで 飲み込んで 飲み込んで行け
どうして僕等は出会い やがて夢も変わってく
確かに まだ感じるよ 僕らは ここで 生きてる

太陽は認めた 大地に抱かれて生きること
繰り返す過ち 何度もこうして胸を痛めているよ

どうして僕等は出会い 君の髪も乱れる
最後に見つけた嘘も 消せない思い出達も

飲み込んで 飲み込んで 飲み込んで行け
どうして僕等は出会い やがて夢も変わってく
確かに まだ感じるよ 僕らは ここで 生きてる
僕らは ここで 生きてる

思い出にもならなそうな日

今日は何もなかったから 気がつきゃ夕方まで寝ていたよ
目も冴えてるし 体も冴えてる それでも心は眠ってる
今日と言う日をもったいなくて なにかの思い出にしようと思って
それでもなんにも浮かばなくて とりあえず自転車に乗った

思い出にもならなそうな日 心と体がつながらない
君への思いと チェーンが絡んで ペダルをうまくこげないよ

今日は何もなかったから 何処へだって行けるはずなのに
太陽だって追えるはずなのに 家の周りをうろついでる

今日と言う日をもったいなくて 君のこと 考えたくなくて
それでもなんにも浮かばなくて とりあえず君のこと考えた

思い出にもならなそうな日 心と体がつながらない
君への思いと チェーンが絡んで ペダルをうまくこげないよ

灯台のそばに

灯台のそばに 君を見つける ための小屋を 作るのさ
壁に絵を描き 窓枠をつけて とりあえず作るのさ

たしかなことなど 何もないけれど 海があれば それでいい
空を見ながら 波の音を聞きながら 君を見つけだすから

もどかしい言葉でも 君からもらえば大丈夫
ばかね それだって 愛の形だって 言うよ

灯台のそばに 君を見つける ための小屋を 作るのさ
風見鶏を立てて 風の向きを知り ポケットには双眼鏡

ああ空と海と大地の狭間で ふり出しに戻る言葉を捜している
でもここにはそんなものは残って無い 未来への言葉だけ

君から何をもらったの 目に見えるものじゃない
ばかね それだって 気づいているって 本当かい。

もどかしい言葉でも 君からもらえば大丈夫
ばかね それだって 愛の形だって 言うよ

灯台のそばに 君を見つける ための小屋を 作るのさ
ひょっこり君が 帰りたくなったら 帰ってこれるように

旅立ったダーリン

こうして僕らは旅立った 助かったって思ってるの？

あいつの涙は僕だって 気づかないわけじゃないけど

この手に受け止める悲しみは もう帰らないものへの憧れだとか

誰かが描いた夢だとか そんなものが混ざってる

FRIDAY から SUNDAY へ つかの間の旅に出る

ああ 君無しで どこまでも 行けるかなんて わからないけれど 目の前の ドアを開ける

この悲しみは 生きることの 鍵が変わる

僕の空は 君の様に今 広がってつながって Oh 青くなる

こうして僕らはやるせない 優しさの中で戸惑ってるよ

この世から何もかもが消え去っても 記憶だけは消さないで

FRIDAY から SUNDAY へ つかの間の旅に出る

ああ あらさがしの毎日も 嫌になって 蹴りとばす前に 目の前の ドアを開ける

この悲しみは 生きることの 鍵が変わる

僕の空は 君の様に今 広がってつながって Oh 青くなる

無理しないで見つめてよ そのままで苦しくても 本当の姿こそ 見つめてよ 見つめてよ

この悲しみは 生きることの 鍵が変わる

僕の空に 月がのぼるなら「旅立って 行くよ」って Oh Oh

伝えたい事だって 伝えられる 明日があれば

僕の空は 君の様に今 広がってつながって Oh Oh 青くなる 青くなる

無理しないで見つめてよ そのままで苦しくても 本当の姿こそ 見つめてよ

無理しないで見つめてよ そのままで苦しくても 本当の姿こそ 見つめてよ

明日はどこへ消える

幼い頃のあの小さな恋を「おろかだった」の一言でたたんでみても
恋は恋で美しい 花が咲いていた

退屈にかられ考えた遊びも あの川の向こうの飛行場も
いつの間にか どこかへ消えた あいつのことも

ああそれから時が ずいぶん経って ああ 形を変える
まだ 追いつけないよ こんな急ぎ足で歩いているのに

明日はどこへ消える 今日の荷物を抱いて
ただ架空の街 遠い空を この街に重ねただけ

ああとどまる事を 選ばないなら ああ 涙を見せずに
また 会えたらいいね その時はどうか笑顔でいて欲しい

冷たい風に触れて 涙凍り付いても
そう悲しいことなんてないよ この街で生まれた
明日はどこへ消える 今日の荷物を抱いて
ただ架空の街 遠い空を この街に重ねた
この街に重ねただけ

キャンディ

指にからめた青いはりがね 重くなるなら全部はずしてさ
あめ玉の中のように 甘くなる日々だからってそれはまだ 永遠じゃない…

疲れてんだったら速度落として 見のがしたもののまた見に行けばさ
止まらない終列車 追いかけて走ってた僕はきっと イカれてた

Hey もう一度たずねて行こう 心がうかぶ場所で
あたらしい意味をくれたら…

果てについたらみんな同じで 思ってたほど辛くないはずさ
ひとときが嘘のように消えてしまうこともあるんだ だけど 泣かないで…

そして僕らはまた走り出す デタラメなんてすぐにバレるから
あめ玉がとけだしてうねる世界になっても 何もいらぬ 僕はとけない…

Hey もう一度たずねて行こう だれも知らない場所で
あたらしい夢をくれたら…

Hey もう一度たずねて行こう 心がうかぶ場所で
あたらしい意味をくれたら…

Hey もう一度たずねて行こう 心が飛べる場所で
あたらしい夢をくれたら…